

社会言語学会では、研究大会における若手の研究者の優れた口頭発表・ポスター発表に対して「研究大会発表賞」を授与しており、保田氏は第31回大会の発表賞を受賞しました。

受賞対象 保田祥、田中弥生（東京大学）、荒牧英治（東京大学）

「繰り返しにおける独話の変化」

（第31回社会言語学会研究大会：2013年春季、統計数理研究所・国立国語研究所）

同じ話を繰り返すとどうなるか

保田 祥

講義やプレゼンテーション、成功／失敗談、就職活動における自己PRなど、同内容を何度も話す機会は一般に多い。そして、完全に同一の話を繰り返しているのではなく、何らかを変化させていると感じるものである。受賞対象となった本発表では、同じ人が10回同じ話をすると話の何が変わるのか調査した結果を報告し、プレゼンテーションなどの練習をする際にはどの程度繰り返すことが効果的であるのか、また、そもそも何度も同じ話を繰り返し練習することで話はいまくなるのか、という疑問について考察を行った。

同一人が同内容の話を繰り返す（Retelling）研究は証言研究が知られており、Retellingが行われることによる記憶の変化が着目されてきた。しかし、聴衆もなく短時間で連続的に独話を3回繰り返す場合には、語が意味の異なる語に入れ替わる割合（記憶の変化）は平均0.06%以下と僅少であった（保田・荒牧2012）。また、Retellingによる内容の変化として、複数人間のRetellingについては、Allport & Postman (1947) が、伝言ゲーム実験の結果、主に leveled（短く、または簡潔になる）・sharpened（関心による詳細の消失または部分の強調）・assimilated（先入観などにより整合性が生じる）の諸現象が現れたことを指摘していた。しかし反対に、Brunvand (1981) は、Urban Legends で Retelling によって物語が長くなり、詳細が付加されてゆくと示していた。そこで、実験協力者5名×10回のRetelling独話（就職活動の模擬面接を設定。予め準備した経験談）を取得し、物語の長さ（語数・時間）や内容の変化（語彙数・保持率）が生じるのか、使用された語の調査によって確かめた。

結果、同人物による同内容の独話 Retelling の場合、10回繰り返しても、独話の長さに短縮や長大などの一方的な変化は見られないことが明らかとなった。但し、本稿の調査によれば、独話 Retelling の長さが落ち着くのは3回繰り返した頃であった（図1・2）。語の保持率も、4回目以降ではほぼ一定割合となっていた（図3）。

しかし、話の長さがほぼ一定となっても、完全に同じ独話が Retelling されることはなかった。次の Retelling（+1回目）において、使用した語が取り換えられる割合は、概ね2割程度で一定していた（図3）。同様に初回（1回目）と最終回（10回目）の使用語彙を調査し

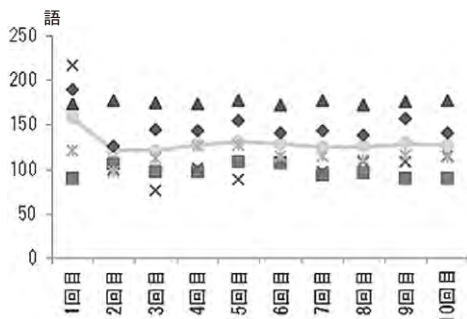


図1 異なり語数 (type) の変化

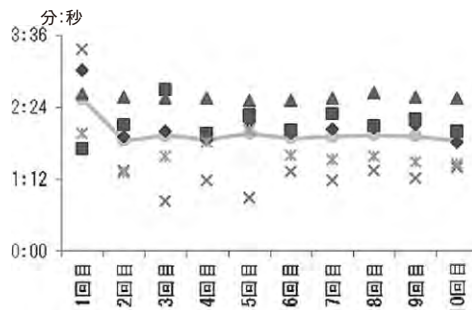


図2 独話時間の変化

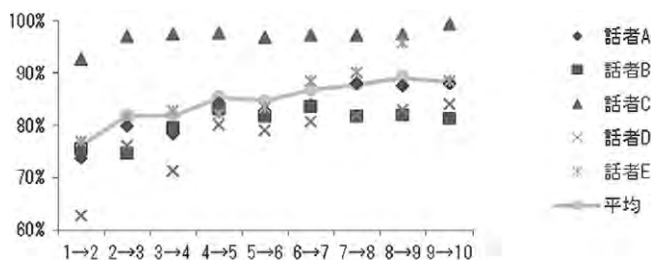


図3 i回目とi+1回目における語の保持率

でも8割の語が一致し、全使用語の10回Retellingにおける平均使用回数が6回であったことから、限られた語彙の中で言い換えを行っていたことも明らかとなった。

なお、10回のRetellingに用いられた語のうち、固定的に用いられ続け、類語句への言い換えも行われない自立語が2割以上あった。図4に自立語の使用回数(被験者平均)を示している。必ず用いられた2割の語は、独話を構成するためのキーワードと推測される。

また、10回のRetellingに伴い、自己説明効果 (Chiら1989) のように同内容を繰り返すほどに練習成果が見られるなど、独話の上達が期待された。そのため、Retellingを重ねることで独話がうまくなるのか、順位判定実験による検証を行った。

実験の結果、単純に独話を練習しても、練習回数が進むごとに聴き手にうまくなったと判断されないことが明らかになった。「対象となる話者のi回目と他の4名のj回目」の組み合わせについて、「うまいと思う順」を判定する実験(実験協力者は短大生147名)を行ったところ、Retelling回数が増えても順位は上がらず、話者順位は概ね固定されていたのである(図5)。実験協力者のコメントからは、含まれるフィラーによって話のうまさを判断していた傾向が見られた。もともとフィラー類の出現は話者によって個人差が大きく、10回のRetellingで減少もなく各回同程度の割合で見られる(図6)。そのため順位が固定され、個人の話の上達は認識されなかったものと考えられる。

以上のように、同じ人による同じ話のRetellingの場合、独話の長さや内容に変化が見られずとも、10回繰り返しても完全に同じ話となる例はなく、毎回使用する語に変化があると

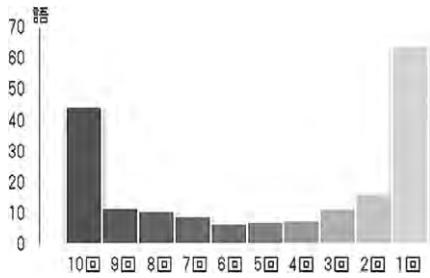


図4 自立語の使用回数 (5人平均)

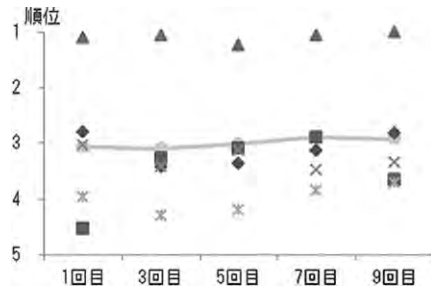


図5 うまさ順位判定結果

※奇数回を用いて実験を行った

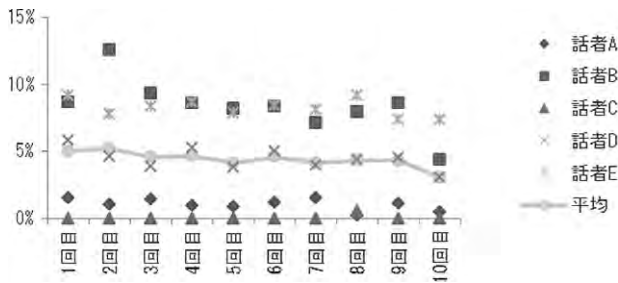


図6 フィラー類の出現割合変化

※言いよどみ・語片・言い直し・感動詞を含む

わかった。どの独話も同内容であるために、一致する自立語（キーワードと推測される）を2割以上保持するが、話者平均2割程度の語は限られた語彙の中で類語句などに取り換えられ続けたのである。この調査結果によって、プレゼンテーションなどの練習を何度繰り返すべきかという疑問については、独話の長さや語の保持率が4回目以降でほぼ一定となっていたことから、3回程度でよいようであるとの解答が得られた。但し、Retellingを繰り返せばうまい話になるのかという疑問については、聴衆やフィードバック等なく一人で単純に練習を繰り返しても、客観的に上達したとの判断はされにくいようだとしか言えなかった。

本発表の展開として、現在は主に同じ話を構成する語の分析を行っているが、今後も話者が話を変化させる理由や聴衆が及ぼす独話上達への影響など、広く研究を進めたい。

●参照文献●

- Allport, Gordon Willard & Leo Joseph Postman (1947) *The psychology of rumor*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Brunvand, Jan Harold (1981) *The vanishing hitchhiker: American urban legends and their meanings*. New York: Norton.
- Chi, Michelene T.H., Miriam Bassok, Matthew W. Lewis, Peter Reimann & Robert Glaser (1989) Self-explanations—How students study and use examples in learning to solve problems. *Cognitive Science* 13(2): 145-

182.

保田祥・荒牧英治（2012）「人が同じ話を何度もするとどうなるか？：繰り返しによって生じる物語独話の変化」『日本認知科学会第29回発表論文集』217-223.

保田 祥（やすだ・さち）

国立国語研究所コーパス開発センター プロジェクト研究員。博士（文学）（神戸大学）。2012年9月より現職。

主な著書・論文：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報表現・事象表現間の時間的順序関係アノテーション（小西光・浅原正幸・今田水穂・前川喜久雄と共著、『自然言語処理』20(5), 2013）。